

H1 【研究・イノベーション学会共催】

2050年カーボンニュートラルを達成するためには

－ 欧米および日本の政策動向からイノベーションを社会実装するための道筋を考える －

2050年カーボンニュートラルの実現に向けて、
日本の産学官が連携した「産業構造や経済社会の変革」に着手

欧米でも類似の動きあり

・米国アマゾン

配送用車両のEV化や、使用エネルギーの100%再エネ化などを通して2040年までに事業活動からのCO2排出量を実質ゼロにするカーボンニュートラルを目指す。

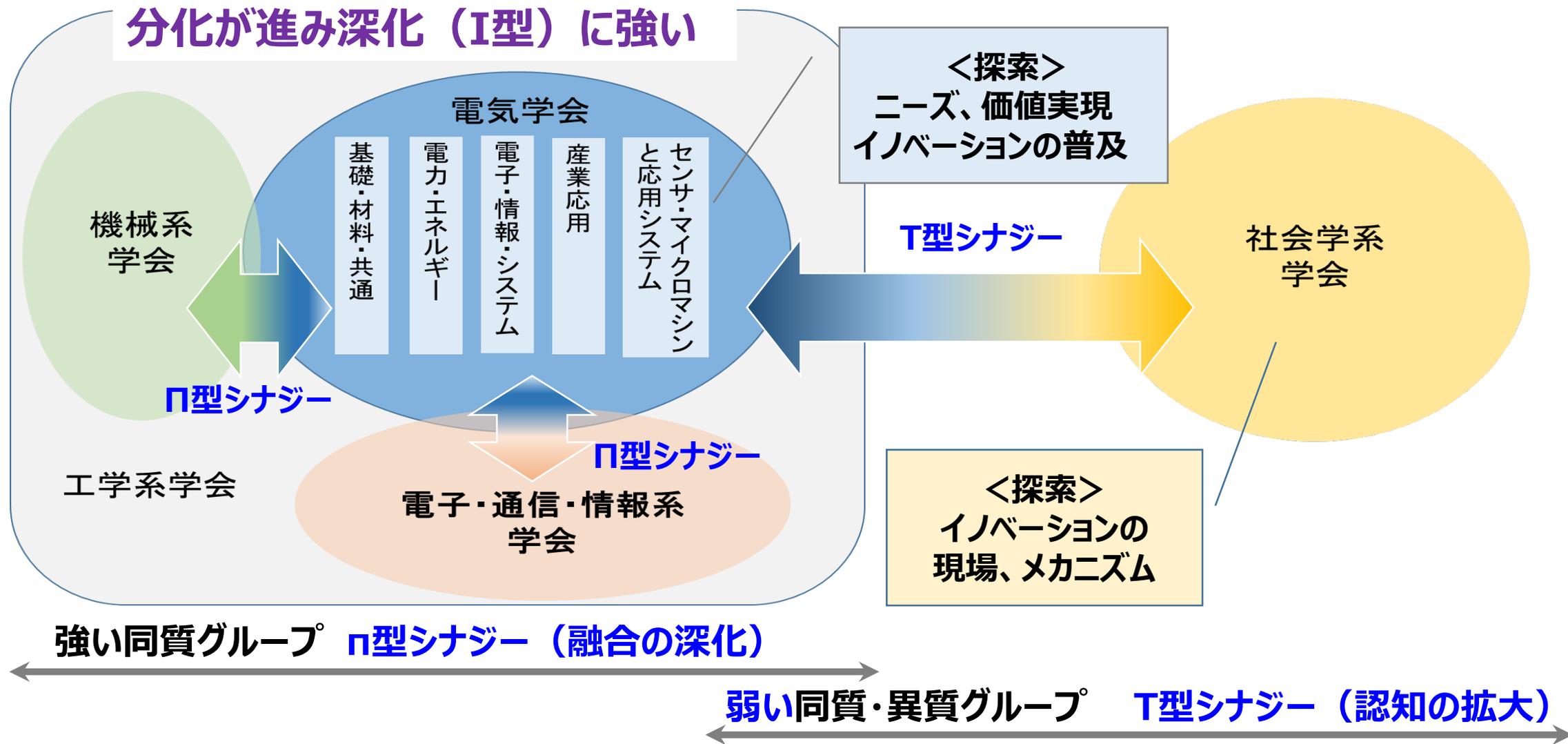
・欧州委員会

環境保護を軸にした産業転換、経済成長および雇用創出を図るための「サーキュラーエコノミー(循環型経)行動計画」を発表。

学会連携の在り方とは

我が国の高度成長期を支えた原動力

多様化する個と社会への適応力



電気学会と研究・イノベーション学会の連携 (First Step)

2020年10月31日

研究・イノベーション学会
第35回年次学術大会 企画セッション
～新たな学会間連携に向けて～

会長対談 ライブ配信

対談者

電気学会第107代齊藤会長 (2020年度)

研究・イノベーション学会 原山会長 (2020~2021年度)

電気学会誌 2021年3月号に記事掲載

電気学会会長からの話題提供

- ・イノベーション事例の紹介
- ・学会連携の在り方
- ・研究者が主体となる取り組み

対談：ライブ配信、視聴
両学会の会員

セッションの次第：2時間セッション
・両学会のプロファイル紹介と会長挨拶
・会長対談

研究・イノベーション学会との会長対談内容(要約・キーワード)

問題意識(問いかけ)	対談でのキーワード
<p>成功するよりも失敗のことのほうが多いという、実際の現場で起こっていることを考えると、経営者はそういう実態をどのように見えていますか？ 失敗の要因は何ですか？</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・企業でのマネジメントイノベーション分析（技術領域の違い） ・上位支援者と研究者「猛獣と猛獣使い」 ・経営陣と技術陣のヒエラルキー以外の協働形態 ・ボトムアップで自らの発想の重要性 ・経営管理層と若い人材との感性のギャップ
<p>昨今、経営の透明性や資源の最適配分に対する経営トップのプレッシャーもあり、研究進捗や成果のチェックが厳しくなり、そのことが、イノベーションの芽をつぐんでしまうことはないか？</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・先進的な研究への経営管理層の関与（程度） ・大学等、メインストリームのテーマ（資金を得る、効率性） ・将来のメインストリームへの手当て不足
<p>成功体験は、バイアスをもたらす可能性がある。成功体験に縛られず、新しい事を行うべきですが、どのようにお考えでしょうか？</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・成功体験→経路依存による慣性、顧客価値の変容 ・単品や物量のビジネスからサービス・ソリューションへ
<p>昨今はサービスへの転換が指摘されています。国の政策や社会メカニズムの視点から、モノづくり企業がサービスにシフトすべきなのか、またシフトが出来るのでしょうか？</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・サービスにシフトすれば何とかなるわけではない。根源にあるのは消費者、生活の質、または生活のレベル ・発想の違う人が集まり、解を深掘り
<p>イノベーションを担う人材輩出に向けて、人材育成はどうあるべきでしょうか？（深化のI型、認知を広げるT型やΠ型など）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・工学系：IからT型へ（2テーマ並列研究の薦め） ・社会学系：他学問分野の手法に相乗り・活用 ・多様性を認める育成のカスタマイズ
<p>電気学会と研究・イノベーション学会との連携について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・次の具体的なアクション ・両学会会員からの提案（期待）

H1 【研究・イノベーション学会共催】

Second Step
に向けて

2050年カーボンニュートラルを達成するためには

－ 欧米および日本の政策動向からイノベーションを社会実装するための道筋を考える －

研究・イノベーション学会との今後のさらなる連携の可能性に向け、会員の皆様と問題意識や課題を共有したい。



事前ステップとして、両学会共催「公開シンポジウム」の企画

- ・会長対談から一歩進めて、シンポジウムにて、**広く両学会内で問題意識の提起と議論**を行い、そこから**共通課題を明確**にする。
- ・シンポジウムでの共通課題を遂行する、**Second Stepの活動（両学会で共同研究会など）**につなげていく。